

本実践のポイント（高校教育指導課指導主事 宮本 洋子）

本実践は、事例を用いて訪問介護の場面を再現し、生活環境を整えることを思考させ、シミュレーション教育を実践することで、生活体験の少ない生徒が具体的に思考ができるよう工夫された授業実践となっています。

また、福祉の専門職として、あらゆる介護場面においてのその人らしい生活を送れるような支援について、主体的かつ協働的に思考するよう工夫がなされています。

1 はじめに

住み慣れた自宅での生活を継続したいと願う人は多いが、介護が必要になると何気ない動作も難しくなる。生活は一人一人違いがあり、それぞれの生活環境・生活習慣・価値観が伴う。介護はサービス利用者の個別の生活を支援することであり、サービス利用者の個別の生活を理解しなければならない。本実践では、在宅サービスの利用者にとって心地よい生活環境整備の視点について取り上げる。高齢者の「その人らしさ」である、多様な価値観や趣味、好み、生活習慣のあり方を捉えさせ、心地よくその人らしい満足した生活ができるよう、生活環境整備の視点を考えさせる。

2 問題の所在

高齢者の「自己決定」や「その人らしさ」「価値観の多様性」という言葉は既習ではあるが、抽象的な言葉であり、紙面の学習においては具体的な理解が難しいという課題がある。そのため、具体的に思考をさせながら、生活環境を整えることで安全かつ自立につながることで、また、生活習慣や価値観の多様性について理解させる工夫が必要である。

3 具体的な取組

事例を用いて教室の和室に訪問介護の一場面を再現し、生活環境を整えることで安全かつ自立につながることで生活習慣や価値観の多様性について思考させた。本が床に積まれ、開いたままになっている状態、ゴミとして認識してしまいそうな物が置いてあることなど、一見バリアの多い居室空間を設定し、環境整備をする上で、サービス利用者にとって心地よい空間について考えさせた。また、その環境整備を訪問介護での支援をシミュレーションさせるなどし、思考する材料を適宜与えることで高齢者の生活習慣や価値観の多様性を踏まえた生活支援の視点を具体的に考えさせる工夫をした。

4 成果と課題

教室に訪問介護の一場面を再現し、シミュレーションを行うことで、生活環境を整えることが安全かつ自立につながるという具体的な思考に役立った。また、一見バリアの多い居室空間を設定し、サービス利用者とのコミュニケーションを図りながらシミュレーションを行うことで、高齢者の生活の一例を具体的に捉えることができ、高齢者がより心地よい自立した生活の視点について考えることに役立った。一方で、思考させる展開方法に課題が残った。シミュレーション後に、教員が改善策を示すのではなく、生徒に議論させるなど思考する場面を設け、試行錯誤を繰り返すことで思考が深まり、強い納得につながる。また、目標が答えのようになっているので、目標のような言葉を生徒が気付けるような展開にすると深い理解につながると意見もいただいた。

5 おわりに

本実践では、訪問介護の一場面を再現し、シミュレーションを通して、生活環境を整えることが安全かつ自立につながることで、また、生活習慣や価値観の多様性について思考させた。適切な介護観をもたせるために、高齢者について多角的で具体的な見方と考え方をもたせることが必要である。将来、生徒が福祉の専門職として、高齢者の生活や特徴を理解し、あらゆる介護場面において、一人一人に応じた対応ができ、その人らしい生活を送れるような支援ができるように、福祉の現場で働いている生徒の姿を常にイメージしながら、指導しなければならない。